

3. レヴィ＝ストロースの「構造」

レヴィ＝ストロースは複雑で脈絡のない「婚姻規制（インセスト・タブー）」の多様に見える規則の間について「・・・親族の基本構造は3つしかない。3つの構造は二つの交換形式を使って構築される。1」とその構造を明らかにし、この構造を解明するにあたり、構造言語学のヤコブソンの音韻論から「無意識的な2項対立」の概念を、生物形態の変異について数学的研究を行ったダーシー・トムソンから「変換²」の概念を導入している。

① 音韻論と「無意識的な2項対立」

音韻論とは言語がどんな音からできているかを明らかにする学問だが、「無意識的な二項対立」と言う概念は、音の組合せ（シニフィアン）と、指し示す意味（シニフィエ）の関係を記号（シーニエ）として理解するソシュールの言語論における、言語の恣意性を下敷きにしている。

言語の恣意性とは、人間を取り巻く物的な状況やどんな物理音によって言語が構成されているのかとは無関係に、音が自由に、恣意的に組み合わせられて意味を表すという、記号としての言語の性質である。

言語における音声は物理音でありながら、「その音を人びとがどう区別しているか」が問題であり、この区別も言語毎に成立している「一種の文化（もしくは社会制度）³」であるという。その単位、音素を発見したのはトゥルベツコイである。

音素とは日本語をローマ字表記した時の一字一字にあたるような、音を区分け意味を識別する為の最小の音の単位だが、その音素には、それぞれの単語の音を区別して聞きわけ、識別に役立つ対立軸、たとえば無声/有声、母音/非母音、密/疎などの対立関係があり、それを弁別特性（示差的特徴）としての二項対立を考え、弁別特性（示差的特徴）のセット（群）として言語音声を整理して世界中の言語を捉えたのがヤコブソンである。

レヴィ＝ストロースとヤコブソンは亡命先のニューヨークで出会い、互いの講義を聴講し合ったという仲だが、ヤコブソンの講義録「音と意味についての六章」の出版にあたって序文を書いたのがレヴィ＝ストロースである。ヤコブソンは上記特別特性（または示差的特徴）である音素の束を「音素の対立は二項対立の組み合わせで表現できる⁴」事、さらにその数（セット）は12である事を突き止めて有名な母音三角形と子音三角形を提案している。

1 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』 P131 平凡社新書 498 2009年11月

2 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P052 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

3 橋爪大三郎 『初めての構造主義』 P59 講談社現代新書 講談社 2006年9月

4 橋爪大三郎 『初めての構造主義』 P62 講談社現代新書 講談社 2006年9月

② 記号としての言語

記号である言語、『無意識からなる二項対立（差異のみからなる）の体系』としての言語においては、「体系における音素相互の対立こそ重要」なのであり、一つの音素と次に発せられる音素との対立関係、その組み合わせ方、音素間の関係によって、その指し示す意味が生じる。音素それ自体の音声的個性とその音が指し示す意味の間には関連性は皆無である。

音素の配列、その「響き」と指し示す「意味」の間には、いわば無意識からの指定が発生するのみであるといえよう。それが各言語によって特徴を異にする各言語集団の取り決めであり、その有する文化内容であると言う。

人間における観念世界は、有限である眼前の物質世界に縛られずに展開するという性質、言語の恣意性故に「言語が何を指し、何を意味するかは、言語の内部で決まる事であって、物質世界と直接に結びつかない。つまり、物質世界のあり方とは独立に、言語のシステム（ひいては文化のシステム）を複雑化し、洗練して行く途^{みち}が開かれている。人類はそうやって、感性や思考をどんどん高度なものにしてきた訳だ。5」 と説明されている。

レヴィ=ストロースはこの 12 ビットで、地球上のすべての言語を構成する音素を網羅できると言う言語の構造を、その分析手法を、人間社会の制度、婚姻規則にあてはめて検討を加えようとした訳である⁶。

③ ダーシー・トムソンからの「変換」

ところでダーシー・トムソンは 1942 年頃に、動物形態変異の様相を、座標変換という視点から読み解き、動物形態の変化を『成長と形態』の中で解説をしている。同じ動物種が、個別環境への適応を通して、それぞれの形態を次第に変異、変換させる過程を追っている。

魚は頭と胴体と鰭と尾と言う 4 組織で全体が構成されているとして、この鰭（ひれ）の形、尾の形、時には胴体、頭が、伸長し、あるいはよじ曲がり、押しひしがれて、形態の変形を伴いつつ魚で有り続ける。変化しつつ、魚としての構成（構造）を保つと言う関係である。

この魚としての形態を保つという意味では、共時性（時代を越えて）として魚なのだが、構成単位（ひれ、尾、胴体など）は通時性（その時代に特徴的に）のレベルで変換する。

レヴィ=ストロースは後年「都合良くいくらでも伸びたり縮んだりするゴム膜の上に、図形を書いて、伸び縮みさせながら別の図形に重ねることができるかを考えてみせている。

5 橋爪大三郎 『初めての構造主義』 P48 講談社現代新書 講談社 2006 年 9 月 同上

6 内田樹 『寝ながら学べる構造主義』 P154 文春新書 文藝春秋 平成 23 年 11 月 15 日

この変換が位相変換である。位相変換に関して不変な性質を位相的性質と言う。これが<構造>である⁷。」と説明しているというが、たとえばガラパゴスの動物達の形態とそのバリエーションが思い浮かぶであろう。

動物達の形態変化は、実体の変容として連続的な変異、変容だが、レヴィ＝ストロースの<構造>と<変換>のアイデアの一つのルーツであると思われる。レヴィ＝ストロースの変換は、さらに「物質世界のあり方とは独立に」展開する人間の精神機能が介在する「融通無碍」な「変換」、その展開過程であり、それらを抱える「構造」である。

「不変項は、新秩序の形成や崩壊と言う歴史的・通時的「変化」とは異なる多様な共時的「変換」の可能性をはらんでいる。⁸」との説明が示しているように、変換の側面を度外視された「不変項」ではなく、変換を孕む、不断の変換という動きを抱えつつ、一定の構造下にある一連の事象を、「構造」として捉えていることが理解される。

「変換と構造の不変性との関係こそ、構造の概念を理解するうえでの最も重要な鍵である⁹」との指摘のように、レヴィ＝ストロースは『構造とは要素と要素間の関係からなる全体であって、この関係は一連の変換、変形過程を通じて不変の特性を保持する¹⁰』とする。

そして<構造>の概念の提示は、「人類学的研究に、歴史とは異なった共時性のレヴェルで作動する構造と言う不変項を導入しなければならないと言う主張でもあった。¹¹」と指摘されており、「共時態のなかのにある連動すなわち変換をとらえることこそレヴィ＝ストロースの構造分析が狙ったものだった¹²」と言う。

7 橋爪大三郎 『はじめての構造主義』P170 講談社現代新書 2006年9月

8 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』P148 平凡社新書498 2009年11月

9 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P064 ちくま新書265 筑摩書房2013年9月

10 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P46 ちくま新書265 筑摩書房2013年9月

11 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』P148 平凡社新書498 2009年11月

12 同上 P149